

高尾利数教授 最終講義 よろずのことにときあり : わが人生のカイロス

著者	高尾 利数
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	47
号	4
発行年	2001-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/00015167

よろずのことにときあり

—わが人生のカイロス—

最終講義（2001年1月12日）

高尾 利数

「とき」をめぐる省察

天が下の萬のことに^{あま}は時あり。生まるるに時あり、死ぬるに時あり、植るに時あり、植たるものを抜くに時あり、……黙するに時あり、語るに時あり、……泣くに時あり、笑ふに時あり、……保つに時あり、棄つるに時あり、……戦ふに時あり、和らぐに時あり。（『伝道の書（コヘレトの言葉）』3：1-8）

旧約聖書はヘブライ語で書かれている……ヘブライ語の「とき」を表わす語「エース」は、神との関わりのだだなかで「打ちかかる」具体的な出来事を意味する……だから「今」（パアム）も、「瞬間」（レガ）も本来「打撃」「打ちかかり」を意味する「脈動」的概念である……この「とき」理解は、ギリシア語では「カイロス」kairos と訳されたが、それは「切断する」という動詞に由来するもので、誕生や死、決定的な出会い、社会的大変動のような重大な経験に用いられる……それに対してギリシア語の「クロノス」chronos は等質で持続的な時間概念である→chronic（慢性的）、chronology（年代記）……「時」という漢字は、一日が寺の鐘の音で刻まれるような等質な、いわば時計的な時間を表現するもので「クロノス」に呼応する。そうした平板な概念に対して、古人は決定的で「切断」的な経験をした場合には、農耕民にとってはまさに生死にかかわる「秋」という字を用い「とき」と読ませた。…例えば「本土決戦の秋」というふうに。……まさにギリシア語の「カイロス」に呼応する理解である。……今、私にとって法政大学での26年以上にわたる「時」が終わるに際しては、折り目・節目に出会ったさまざまな出来事に、いわば実存的な「秋性」を感じる。わが生涯には、なんと多くのカイロスが与えられたことだろうか、と！

わが生涯におけるカイロスの出会い

生まれは1930年（世界恐慌の年、15年戦争の始まり）……それ以来70余年生きてきた。……8人きょうだいの末子、「利数」とは「また男児が一人」の意とか……幼児のとき、腸炎になり死にかけた。さらに麻疹が目に入り、右目を失明しそうになる……右目の瞳孔に膜がかかり矯正できず生涯白内障的、そのため軍隊はダ

メ……戦時中は銃の照準が合わせられず、軍事教練では苦勞した……旧制の諏訪中学で批判的姿勢と思考を学ぶ（奉安殿に背を向け、天皇を揶揄し「皇国史観」を公然と批判する国語教師など）……英語（敵性語）と数学を特に勉強するように勧められた……卒業生の軍事教官により N・ホーソーンの『緋文字』や、ブロンテ姉妹の『嵐が丘』『ジェーン・エア』などを知らされ、米英＝「鬼畜」観念の偽りを知らされる……「陸軍多摩研究所」となった母校で技術将校らからアメリカの民主主義的政治システムや大統領制について学び、「国体」への疑問、大日本帝国の敗戦予言などを聞く……敗戦後進駐軍司令部に質問しに行き、日本軍の姿勢との違いを直感し、二世の女性教師から英会話を直接習い始めた……兄たちに従い医学部に進学……キリスト者のドイツ語教師から「無教会主義」、内村鑑三、ゲーテ、ルター、ヒルティを学ぶ……友人の勧めによって、生涯の友人となるアメリカ人宣教師夫妻に出会い（二人は後にカリフォルニアの大学教授となる）初めて英語で神学書を読む……実存主義に惹かれ、キルケゴール、シュライエアマッハー、ドストエフスキーを読む……キリスト教を学ぼうと医学部を止め、茨城キリスト教大学に転校……1953年までアメリカ留学……テキサス州のファンダメンタリズムの大学で聖書学を学ぶが、保守的キリスト教に失望……コロンビア大学・ユニオン神学校ジョイント大学院に入り、Paul Tillich 教授と出会う……生涯の親友となった James Greer と出会い、音楽に魅せられ、カーネギー・ホールに通う……畏友フランクの自殺と Tillich への疑問……大谷光詔氏（後の本願寺法主）を介して仏典に取り組み、芥川竜之介、有島武郎等を読む……次第にキリスト教に疑問を感じ、援助も打ち切られやむなく帰国……強く希望されて茨城キリスト教学園高校で教える……しかし再度宣教師らと衝突、その間にカール・バルトに真剣に取り組む……東京神学大学大学院に入り、カール・バルト、R・ブルトマンなどと取り組む……妻しのぶと出会い結婚……学長の熱意ある招きを受け、茨城キリスト教短期大学専任講師となる……長男に「和信」と命名（和解を信じたくて）……聖書の歴史的・批判的研究に集中……次男に「直樹」と命名（自分に欠けている「素直さ」を求めて）……保守的な宣教師たちと衝突し授業停止処分を受ける……長女に「のぞみ」と命名（希望を見失わないように）……名古屋学院大学経済学部で招かれる（初めて経済学を真剣に学ぶ）……日本基督教団に移籍し、尾張一宮教会に赴任……数年後関東学院大学神学部で招聘され組織神学を講じる……「大学闘争」との出会い（カール・マルクス、フォイエルバッハの精読・討論、岡本 正学長や他学部教員や「ベ平連」との出会い、教職員組合書記長としての豊かな経験）……批判的神学をめぐる討論

(モルトマン, ボンヘッファー, 八木誠一, 滝澤克巳, 田川建三など) ……神学部闘争を経て, 同学部解体に至る……失職……法政大学第二教養部に招かれる……「よき師, よき友」そして忘れ得ぬ学生諸君との出会い (特に矢内原伊作氏, 岡田裕之氏など) ……法政大学社会学部に移籍……よき先輩・同僚, よき学生を介しての社会学の学び……また幅広い出会い (広松 渉, いいだもも, ジョン・ダウアー, 丸山圭三郎, ソシュール, ケン・ウィルバーなど) ……こういう「はずれ者」を長年にわたり受け入れてくれた法政大学社会学部に感謝……広い出会いの場 (横浜でのフリースクール, Vision, 東京朝日カルチャー・センター, 横浜・朝日カルチャー・センター, 早稲田奉仕園などでの連続講義) ……1997年 夏ひとり娘のぞみが急死……姉や同僚・友人らの死……ゴータマ・ブッダへの接近……「目覚め」のほのかな予感と感激……しかし同時になお「人間は生きる限り迷う者だ」(ゲーテ)との実感……そして人の一生は, 所詮途上のものに過ぎないのだとのユーモアや「安らぎ」をも含む省察も深められる ……されど同時に, この生は限りない学びの道, 避けられぬ抗いの道の途上でもあると痛感される……そして死というカイロスに至るまで, まさに「有り難い」残りの日々を, 自分のことだけではなく, 少しは他者のことも思いつつ生きていきたいと思う。

「とき」の質と主体の呼応—カイロスはいかにして現実となるか

ハイデガーは, 「時を持つ」(Ich habe Zeit. I have time.) という表現の頹落を批判した……「とき」は所有されたり, 処理可能になるモノではない……むしろ存在の根本規定として「自分は時である」(Ich bin Zeit. I am time.) と言うべき。すると Time passes away. とはまさに自らの死を意味する。「暇つぶし」(I kill time) は, 「自分を殺す」ことであり, まさに自殺。……「死を思はぬは, 生をも思はぬなり」(最澄) ……「……朝には紅顔ありて, 夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば, すなはち二つの眼たちまちに閉じ, ひとつの息永く絶へ, 紅顔むなく変じて桃杏のよそほひを失ひぬるときは, 六親眷属集まりて嘆き悲しめども, 更にその甲斐あるべからず……野辺に送りて夜半の煙となし果てぬれば, ただ白骨のみぞ残れり。……」(蓮如『御文章』より) ……「無常」の実存的自覚なしには, 「涅槃」(真の平安) はありえぬ……私は, この文章が持つ悲痛さを, 3年半前にわれらが最愛の娘のぞみを亡くしたときほど痛切にそのカイロス性を味わったことはない。日本とは非常に違った文化が生み出した聖書にも, 心に響く多くの詩がある。

なんじ人を塵ちりに帰らしめてのたまはく
人の子よ、汝ら帰れと。
汝の目の前には、千年ちとせもすでに過ぐる昨日のごとく、
また夜の間のひとときに同じ。
汝これらを大水の如く、流れ去らしめたもふ。
彼らひとよは一夜の眠りの如く、朝あしたに生はへ出いる青草の如し。
あしたに生へいでて栄え、
夕べには刈られて枯るるなり。

.....

我らが年を経る日は七十歳ななそじに過ぎず、
あるひは健すこかにして八十歳やそじに至らん。
されどその誇るところは、勤勞と悲しみとのみ、
その去りゆくこと速すみかにして、我らもまた飛びされり。

.....

願はくは我らに己おのが日を数ふることを教へて、
知恵の心を得しめたまへ。

(『詩編』90篇)

これらの言葉が訴えるような生の実相に「真向かう」姿勢が、主体の側にならば、「とき」はカイロス性を失うのだ。次のような詩の訴えもある。

My heart leaps up when I behold
A rainbow in the sky.
So was it when my life began,
So is it now I am a man,
So be it when I shall grow old.
Or, let me die!
The Child is Father of the Man,
And I could wish my days be
Bound each to each by natural piety.

(William Wordsworth)

わたしの心は躍動する
空に虹を見るときに。
幼いときにもそうだった、
大人となった今もそう、
老いてもそうでありたい。
さもなければ死なせてほしい！
子どもは大人の父だ、
残された日々もまた 自然おのづからなる
敬虔うやまいごころの念に結ばれてほしい。

(ウイリアム・ワーズワース)

感動や敬虔の念などは、なぜか「言葉も絶えた」ような経験に出会ったときに「出来事」となる。しかもそれは、ひたすらなる「求め」の果てに「おのずと」生

起する事柄だと悟らされるのだ。そのかぎりにおいてそれは「神秘」(mystery=奥義)だとも言えよう。そもそも「ミステリー」とは、「口を閉じる」に由来するのだ。人生において絶句するほかないような経験をしたことのない人が、どうして「曰く言いがたし」を自分のこととして語れるであろうか。

人間は、36億年もの長い「とき」を通じて進化してきて、さしあたりわれわれが知る惑星での進化の「頂点」にまで達してきた。その過程で社会的・共同的生活の必要上、分節的・分析的で複雑な言語という他の動物には見られない特徴を生み出し、「知性・理性」(intelligence)を発達させてきた。それは元来「……の間から拾い選び取る」を意味する動詞 *intelligere* に由来するもので、一定の時間と空間を介してしか機能しない。演繹 (*deduce*=はずして引っ張る) にせよ、帰納 (*induce*=引っ張り込む) にせよ、時間・空間を基軸にして「〈^{こと}事〉分け」「〈^{こと}言〉分け」を繰り返す「理解」「知解」(「分かる」「分ける」「分け」)を広げ深めてきたことに他ならない。こういう「知性・理性」は、対象に向かうほかないものとして、主体と客体に分裂する「二項対立」的にならざるをえない。そして三段論法であれ、弁証法であれ、相互批判や検証を介して、「論理化・論争・^{こと}言^{あげ}」を徹底的に続けなければならない。そのようにしてわれわれは、大いなる「文明」を築いてきた。

しかし、人間が具体的に生きている状況のなかではしばしば、生の一切を^{ホーリスティック}全体的に、しかも一挙的に、あらゆる「思考」を差し挟まずに洞察するというような心の働きを経験する。そうした心の働きは古来「直観」(*insight*)と呼ばれてきた。死の直前などに自分の一生のすべてを瞬時に「見て」しまい、強い情動・感動を生み出すような経験がそうであろう。戦時中の特攻隊員の多くは、死を覚悟した最後の瞬間に人生全体をパノラマのように一挙に見たという。それはまさに「直に観る」こと、「内側において観る」ことであろう。詩人や芸術家などにおいて顕著に見られるとおりである。それはとりわけ、一切の状況説明や表題づけを拒む音楽の場合に顕著であろう。哲学の世界でも(プロティノス、スピノザ、ベルクソン、ホワイトヘッドなど)、自然科学の世界でも(ニュートンの万有引力やベンゼン環などの「発見」に際して)、根本的なパラダイム転換などが認識される状況のなかで生起する。

「直観は、それが知る世界の中へと入りこむ。直接体験に基づき、記号(抽象的概念)なしに絶対的な知識を生み出す。これに対して知性は、それが知る世界の外側にとどまる。こ

ちらは記号を必要とし、常に何らかの視点を基準にして、相対的な知識を生み出す」(アーナ・A・ウィラー『惑星意識』, 210-211頁)。

スウェーデンのノーベル賞級の天文科学者で国際的に称揚されているウィラー博士は、昆虫から高等哺乳類の眼の構造や、爬虫類・哺乳類の脳と新皮質から成る「三位一体脳」にまで達した人類が、限りなくゼロに近い確率でわれわれの生存を支える全宇宙的なバランスのなかで呼吸したり、食物を口に入れることができるという言語に絶するほどの精妙・絶妙な大宇宙・小宇宙が呼応するリアリティーの総体を観照するとき、この宇宙には、重力場・電磁気場・強い核力・弱い核力の場と並んで「惑星心場」(planetary mind field) とでも呼ぶべき「場」の呼びかけを仮定せざるをえないと訴えている。近代を突き抜けた現代の科学は、そういう全体的・統合的な視座を求めざるをえなくなっている。そういう「直観」を踏まえて、現代は新しい「パラダイム」の変容を迫られているのかもしれない。いわゆる「ポスト・モダン」的問いかけである。

そうした視座から見れば、あらゆる「とき」は、^{クロノス}「カイロス」の契機を宿していることが洞察されるであろう。そうした生き様のなかでは、無意味や倦怠は場を持たず、生の全体は、人知を超絶する絶妙なバランスのなかで躍動する万華鏡へと変貌するのだ。そういう生の共同・協同(倫)は、「狂人の主催になるオリンピック」(芥川竜之介)などではなく、^{ことわり}「理」に満ちた^{みちのり}道程に変容するであろう。そこでは空しい^{ニヒリズム}虚無主義も利己主義も、本来色あせた^{うつ}「空ろなもの」「無なるもの」(Das Nichtige)と映し出されるほかあるまい。私は、ドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』で、アリョーシャが訴えるくだりを思い出す。彼は、人生は孤独で暗く無意味だと嘆く人に「それはあたかも太陽を背にして自分の影ばかりを見つめ嘆いているようなものです。なすべきことはただ、身を翻して太陽に真向かえばよいのです。そうすれば太陽が自分に燦燦と降り注いでいて、小鳥たちが声高く囀っているのに気づくのです」と。それは「180°の方向転換(悔い改め)」を示唆する。

不条理と悪のリアリティー

だがわれわれは、自らを真に現実的かつトータルに捉えようとするならば、人間が知性・理性を持ちながら、そして直観力を育んできながら、なぜか「悪」としか呼びようがないものを生み出すこともできる「不条理で不可解な」存在でもあることを無視できない。その事実についての「悲しみ・嘆き・苦しみ」を「知らない」

者は、カイロスの力も恵みもついに味わうことはないであろう。

かつて私が留学のために日本を離れようとしていたとき、一人の友人が、ある哲学辞典を贈ってくれて、その背表紙にドイツの文豪ゲーテの『ファウスト』からの一節を書き付けてくれた。

おのがパンを涙して食せしことなき者、
己が臥所^{ふしど}にて長き夜を泣き明かせしことなき者、
その者は、己^{おの}が力をも、
また天上の力をも
知らざるべし。

私の生涯の親友であった James Greer は、かつてニューヨークの安アパートで、私のために一所懸命にベートーヴェンのソナータ『悲愴』を弾いてくれたあとで、生涯忘れることのできない質問を私に向けた。“Have you ever suffered?”（「君は苦しんだことがあるか！」）と。一瞬たじろいだ私に彼は微笑みながら言った。“Forgive me. Everybody suffers”（「赦してくれ。誰も苦しむよね」）と。

私は浄土真宗門徒の家に生まれたが、医学生になるまで、本当には親鸞の文章を真剣に読んだことはなかった。ニューヨークに来て、コロンビア大学の優れた図書館で、恥ずかしながら初めて親鸞の『教行信証』を直に読み始めた。そのなかで、爾來心に刻まれた一節は次の言葉であった。

誠に知んぬ、悲しき哉、愚禿鸞^{ぐとくらん}、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚^{じょうじゅう}の数に入ること喜ばず、真証^{ましん}の証^{あかし}に近づくことも快まざることを。恥ず可し、傷む可し。

この言葉の深刻さは、当時傲慢にも人生の痛みや苦しみを人並みに経験したなどと思いがっていた23歳の私には、到底本当には洞察できなかった。だが今や自らが「七十歳^{ななそじ}」を越えて、ようやくこういう言葉の真実さが少しは身に沁みるようになったと思う。そうであれば、老いることは、なんと「有り難い」ことであろうか！

最大のカイロスは？

すべてのクロノスが、カイロス性を宿すことを知ることは、まことに「有り難い」

ことであるが、すべてのカイロスが重さと深さにおいて同列ではない。今「君の最大のカイロスとは?」と問われるならば、気障で月並みと響くであろうが、歴史上の何億という先達に和して、「ナザレのイエスと、ゴータマ・ブッダとの出会い」と答えるのが、一番素直な気持ちである。その際、言わずもがなの蛇足ではあるが、この「ナザレのイエス」は、実体化され絶対化された独善的な教義を楯にする禍多き宗教のひとつにすぎない正統的キリスト教が、おこがましくも千年単位で喧伝してきたような唯一絶対で、最後の、排他的な意味での「イエス・キリスト」のことではない! またゴータマ・ブッダと言っても、その死の直後から「裏切られて」神格化され、遂にはヒンズーの神々と同列に奉られたような「ホトケさま」や、「葬式仏教」用の偶像のことではない! そういう「神々」は、そもそも最初から実在したことはないし、すでに「死んだ」のだ! もしそれらがなお生き延びているとすれば、「殺さねば」なるまい。神殿の両替商人の机をひっくり返したイエスや、「バラモン」や「カースト」や「輪廻」を否定した「殺仏殺祖」の祖たるゴータマ・ブッダの後塵を拝しようとするならば、そうした「決意表明」は避けられまい。

しかしこれは何とも鼻持ちならぬ大言壮語かもしれない。さすれば小さいながら自分にとって「大切なカイロス」も述べねばならない。私にとって、やはり大きな出会いとなった神学者カール・バルトは、かつて結婚について次のように語った。「結婚とは、大きなことがいかに小さなことであるか、小さなことがいかに大きなことであるかを学ぶ場である」と。肝に銘じておきたい知恵の言葉だと思う。そして、自分の子どもたちを授かり、さらにまさに「世界で一番可愛い孫たち」にまみえたことは、自分にとっては大切なカイロスである! 今や次男の妻となったアメリカ娘は、あるとき私にコーヒー用のマグを贈ってくれたが、そこには、“Ask me about my grandchildren!” (私の孫たちのことを尋ねてくれ!) と書いてあった。それは、われらが孫たちの素晴らしさについての私の「客観的」認識の正確さをよく表現した言葉ではある!

クロノスのただなかにあってカイロスの生きる機縁を促す知恵の言葉として、私はエマーソンの「成功へのレシピ」を思い出す。

Recipe For Success

成功のためのレシピ

To laugh often and much;

しばしば、そしてたくさん笑うこと、

to win the respect of
intelligent people and
affection of children;
to earn the appreciation
of honest critics and endure
the betrayal of false friends;
to appreciate beauty, to find
the best in others; to leave
the world a bit better, whether
by a healthy child, a garden patch
or a redeemed social condition;
To know even one life
has breathed easier,
because you lived. This is
to have succeeded.

(Ralph Waldo Emerson)

知的な人々に尊敬され、
子どもたちに
愛されるようになること、
正直な批判を有り難いと思い
偽りの友の裏切りに
耐えること、
美しいものを味わい、
他者のうちに最善のものを見つけ、
死ぬまでに、健全な子どもひとりでも、
小さな花園を一つでも遺したり、
社会の条件を僅かでも改良したりして、
世界をほんの少しでも良いものにすること、
あなたが生きていたおかげで、
たとえひとりの人でも
安らかに生きられたと知ること、
これが成功したということなのです。

(ラルフ・ウォルドー・エマーソン)

言葉の大切さと危なさ

上に引用してきたような言葉は、どれも深く味わうことを促すものだと思うが、言葉の働きは実に精妙なものであり、「聴く耳ある者は、聴くべし」という忠告を忘れないことが肝要である。かつてイエスは、預言者イザヤの言葉を引いて警告した。

あなたたちは聞くには聞くが、決して理解せず、
見るには見るが、決して悟らない。
この民の心は鈍り、
耳は遠くなり、
眼は閉じてしまった。
こうして彼らは目で観ることなく、
耳で聴くことなく、
心で理解せず、悔い改めない（方向転換、変容に至らない）。

(『マタイによる福音書』13:14-15)

仏教には「観音」という素晴らしい言葉がある。「音を観る」ことは、本来「菩

薩」しかできない。だが菩薩の原語は「ボーディ・サットヴァ」で、自らの悟りだけではなく、同時に衆生すべての悟りを願う生き様を実践する者のことである。つまり自利と利他が相即する生き様の人のことである。このような人こそが、祝福をもたらす言葉を語ることができ、事柄の本質を「聴き」「観る」ことができるのであろう。

言葉には精妙な「カテゴリー」がある。即事的・即物的で叙述的なカテゴリーの言葉（自然科学などの分別的な言葉）もあれば、間主観的・象徴的なカテゴリーの言葉（対話や哲学や文学の言葉）などもある。さらには、マンダラ的で非二項対立的なカテゴリーの言葉（詩の言葉や真っ当な宗教の言葉など）も生じる。これらの微妙な差異・差延を思いながら言葉を尽くさないと、「語る」は「^{かた}騙り」に転化してしまう。恐ろしいことである。

「教授」は欧米語では professor であるが、それは「人前で語る者」の意である。「教えを授ける」などとは、何と傲慢な言葉であろうか！ それは恐ろしい行為である。私は次の警告を忘れないようにと自戒している。「わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち多くの人が教師になってはなりません。わたしたち教師がほかのひとたちより厳しい裁きを受けることになると、あなたがたは知っているからです」（『ヤコブの手紙』3：1）。

すでに「ミステリー」に関連して述べたように、畢竟するところ、言葉では尽くせないのが生の現実の総体であろう。

カイロスの超個性と共時性—「時代のしるし」

これまで述べてきたカイロスは、主として個人のレベルのものであった。だがそれではあまりにも重大な局面を欠落させたままであろう。人間はそもそも生物学的に言っても「群れて生きる」生物である。その「共同体性」を抜きにしては、人間に独特な言語活動すらありえない。その共同性は、個人性が意識されるはるか以前から人類を規定してきた現実であろうし、カイロス意識も当然共同体的・共時的性質を原初から宿していたであろう。そのことは、「個の意識」を際立たせてきた近代以降の特に欧米的意識では、ともすれば見落とされがちであろうが、現代においては、そのことが再度深みを伴って認識され始めていると言うよう。

「個人心理学」を唱えた A・アドラーが、人生において最も大切な姿勢として、Gemein-shaftsgefühl (social feeling=共同体感覚) を力説してやまなかった理

由も、そこにあったのであろう。

周知のように、紀元前6-5世紀は、人類の文化史上、しばしば「機軸の時代」(axial age)と呼ばれてきた。その時代には、なぜか洋の東西を問わず、思想上重要な展開を画するような人物が出現した。孔子、孟子、ゴータマ・ブッダ、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、イザヤ、エレミヤなどである。なぜそういう現象が起こったのかは今もって不可解であるが、人間の進化の過程で、重大な心的展開がなぜか共時的に生起したと了解してもいいのかもしれない。それについては、「共時性」(synchronicity)をめぐるC・G・ユングの研究が示唆となるであろう。そこには例えば、A・ウィラーが提唱する「惑星心場」(Planetary Mind Field)のような宇宙的意識の促しが作用しているのかもしれない。

それはともかく、類としての人間の意識に、洋の東西をも越えるような広がりや、なぜか共通の認識や直観の変化が見られることは確かであろう。そのことは、近代においては「時代精神」(Zeit Geist)というような言葉で表現されてきた。現代ではそういう感覚は、「パラダイム転換」と表現されている。パラダイムは、しばしば「思考枠」と訳されているが、それでは種々の自然科学にだけ当てはまる概念であるかのように響くので、むしろ「意識転換」とでも表現したほうがより適切なのではあるまいか。自然科学の諸領域でしばしば、重要で根底的な理解の枠組みの変化・転回が、地理的にも学問的にもまったく連携していなかったところで、いわば同時的に報告されるというケースは、有意味な頻度で生起しているようである。それが同じような展開過程にある人々の心に共時的に作用しているとも思われるのである。いわゆる「ときのしるし」と称される出来事であろうか。

「天からのしるし」を求めるサドカイ派とファリサイ派の人々（今ここでの文脈で言えば、伝承されてきた歴史や理念を硬直化・実体化して「死んでしまった教条」に頹落させてしまった人々とでも捉え得ようか）に向けたナザレのイエスの痛烈な言葉が伝承されている。

「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見るができないのか」(『マタイによる福音書』16:2-3)。

この「時代のしるし」を見ることが、カイロスの的に生きるということであると言えよう。

違いを生むもの

クロノスを切断してカイロスが^{しゅったい}出来るといっても、時計の針の動きが物理的に変化するのでもないし、「天変地異」として物理的・肉体的に観察されるような事柄ではないであろう。真のカイロスの転換は、場合によってはフィジカルなしるしを伴うかもしれないが、心の芯からの変容を求めずに、外在的なしるしのみを求めることが横行する時代には、「預言が廃れ、天啓は遠ざかる」のであろう。イエスの断罪的警告は、そういう事態を示唆しているのかもしれない。前掲の個所に続いてイエスの言葉が伝承されている。

「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがるが、ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない」。そしてイエスは彼らを後に残して立ち去った。

（『マタイによる福音書』16：4）

「ヨナのしるし」とは、旧約聖書の『ヨナ書』で、ヨナが、彼に告げられた神の言葉（大都市ニネベが犯しつつある悪ゆえの断罪的預言）を逃れようとして大魚の腹に飲み込まれるという苦難に遭ったことである。「大魚の腹」は、真実を告げることによって苦難を受けることを恐れ、束の間の偽りの安逸に逃げたゆえに受けねばならなかった暗闇と苦難を象徴している。実に示唆に富む「物語」である。ヨナは、われわれの文脈でいえば、カイロスに真向かうことを避けて、クロノスへの逃亡を望みながら、逆に落ち込んでしまった暗闇と死の徴表である。

後の時代にパウロは、イエスにおいてカイロスが生起したと宣べ伝えるイエスの追随者を迫害していたが、律法遵守を自らのレゾン・デートルとしていた自分の絶望を介して、イエスの死と復活の告知を、新しい「神の義」のカイロスの告知と受け止めた。そのとき彼は、自ら「ところが今や」（『ローマの信徒への手紙』3：21以下）というカイロスの次元（アイオーン）を語り出したのである。それ以来彼は、悩み挫折を繰り返していた青年ユダヤ教徒から脱出し、「喜びの使徒」へと変貌し、世界史を変えるほどの働きをなした人物となったのである。「わたしはなんと惨めな人間なのでしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるでしょう」（『ローマの信徒への手紙』7：24）と叫んでいた彼が、文字通り変貌し、自ら「輝かしい勝利を収めた」者と宣言し、いかなる苦難にも屈せぬ「証人」として、あらゆる人々に向かって「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」（『フィリピの信徒への手紙』4：4）と告げる者になったのである。

カイロスの主観性の問題

さて、カイロスをめぐる論じてきたが、例えばパウロがイエスにおいて、個人史的な意味でのカイロス性を超えて、さらに世界史的・宇宙史的なカイロス性を認識したという場合、それはあくまでもパウロ個人の主観的判断・観念の業にすぎないのではないかという問題がある。だが彼においては、「ところが今や」というカイロスの直観、しかも彼個人のこととしてのみならず、同胞全体のこととして（『ローマの信徒への手紙』9-11章）受け止められている。そのあたりの消息を証言する言葉としては、『ガラテヤの信徒への手紙』4:4の「しかし、時が満ちると」（ギリシア語原文の字義通りの表現では「クロノスの充満が到来したとき」である）がある。もちろん、それとても彼の主観的・観念的な解釈ではないかという反論は当然ありうる。私はむしろ、彼の主体的な受け止めとして、単なる主観性とは区別すべきではないかと思う。それは、傍証として言及するとすれば、キルケゴールが、「Subjektivität (subjectivity)こそ真理である」と述べた際に意味していたのは、「主観性」ではなく「主体性」と訳すべき事柄であり、それに呼応する把握であろうと思う。パウロの、「目から鱗のようなものが落ちた」というあの有名な「ダマスコ途上の」回心の出来事は、主体的な体験であって単なる主観的な経験ではなかったのだという問題は、自らが主体的に関わらざるをえない経験を踏まえなにかぎり、いずれに組するにせよ、客観的に証明できるような事柄ではないであろう。ゆわゆる「後知恵」としての世界史的な考察のなかでは、パウロの回心を、ユダヤ的な文化が、ヘレニズム的文化のなかに、その変質を迫りながら自らを止揚しつつ新しい普遍性のうちに変貌した過程と了解することも可能であろう。それを「偶然」と称しても、あるいは「歴史の皮肉」と解しても、誰も客観的認識などとは断じえない。歴史を主体的に語るということは、そういう自らのぎりぎりの参与的判断が迫られる作業でしかありえない。

そのことは、現代の自然科学が、とりわけ「ビッグ・バン」と宇宙の膨張などの現象を、さらにまた量子力学誕生以来の天体物理学的知見に照らして、その各過程出現の確率が無限にゼロに近いものとされる不思議に接するとき、はたまた現代分子生物学的な知見が増えるにつれて、その驚異的に絶妙な進化の過程を、限りなくゼロに近い確率でしか考えられないときに、あくまで「偶然」という「信念」に固執することが、それを例えば「自然の摂理」と表現することより、「より客観的・科学的」と言えるのかとの微妙な事柄に呼応するとも言えよう。これは、数理論的な理性が判定を下せるような事柄ではなく、むしろ「直観」が物言う次元の事柄で

はあるまいか。それは村上和雄筑波大学名誉教授（遺伝子解読で世界的に認められている第一級の科学者）が「Something Great の促し」と表現するような了解、あるいは佐藤 進京都大学名誉教授（振動制御，科学技術論で著名な科学者）が「自然の摂理」と表現するような事柄に通じるのではなかろうか。

クロノスを断ち切って立ち現れるカイロスのリアリティーとは、宇宙・人生への参与的な（シンクロニスティックな）、きわめて精妙な（subtle）了解・直観に関わる事柄ではなかろうか。P・ティリッヒが，“acceptance of acceptance”（受容の受容＝「受け容れられていることを受け容れること」と表現したときに含意していたような現実了解だとも言えようか。

要するに、クロノスのただなかでカイロスが生起することには、どのようにしてかは定かではないのだが、各人の「心の構え」とでも言うべき姿勢いかんが関わっているのであろう。まさに「聴く耳ある者は、聴くべし」である。それに関して思い出される英詩がある。最後にそれを引用するのをお許しいただきたい。

The Winds of Fate

運命の風

One ship drives east and another drives west

あるものは東に、もひとつは西に

With the selfsame winds that blow.

おんなじ風で船は進むが

“T’s the set of the sails

ゆくべき道を示すのは

And not the gales

^{はやて}疾風ではなく、

Which tells the way to go.

それは帆のかけ方。

Like the winds of the sea are the ways of fate,

海の風に似ている運命の風

As we voyage along through life:

生涯を旅するときに

“T’s the set of a soul

ゴールをきめるのは

That decides its goal,

^{なぎ}風か嵐かではなく、

And not the calm or the strife.

それは心の構え方。

(Ella Wheeler Wilcox)

(E・W・ウィルコックス)

横田宏子訳

われわれ人類の未来はどうなるであろうか。希望を失いがちな現代においても、深い警告と同時にさらなる求道の方角を指し示す暗示に満ちた言葉がある。

後の日に、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

あなたたちの息子や娘は預言し、

老人は夢を見、

若者は幻^{まぼろし}(vision)を見る。 (『ヨエル書』3:1)

そういう「^{フネウマ}霊=風」は、われわれの魂の注ぎ出しとしての「求め」を凌駕しつつ「^{アノコテン}新しく=上から」、カイロスとして、しかも「思いのままに吹く」(『ヨハネによる福音書』3:8)のかも知れない。それはいわば「^{ことだま}言霊」として、人間の魂に真っ当な言葉を預け、老人たち(複数であることに注意!)には死や虚無を突き破る魂の高揚を感じさせ、若者たちには将来の展望を広げさせるということの徴表であらうか。

いずれにしても、私が「語ることを止める」べき「カイロス」がすでに来ていることは、確かなことだと思う。ご清聴を心から感謝いたします。

座右の銘

最後まで忘れたくない(または、忘れてはならない)言葉。

- ① なんじら多く教師となるな。教師たる我らの更に厳しき^{さばき}審判を受くることを、汝ら知ればなり。(新約聖書、『ヤコブの手紙』3:1)
- ② 心は^{よろずのもの}万物よりも^{いつは}偽るものにして甚だ^{はなは}悪し、誰かこれを知るをえんや。われエホバは心腹を^{さく}察り^{じんちょう}腎腸を試み、おのおのにその^{みち}途に^{したが}順ひ、その^{おこなひ}行為の^み果によりて^{むく}報ゆべし。(旧約聖書、『エレミヤ書』17:9-10)
- ③ 心は遠くに行き、独り動き、形体なく、胸の奥の洞窟にひそんでいる。この心を制する人々は、死の束縛からのがれるであろう。(『ダンマパダ』37)
- ④ 実にこの世において、^{うら}怨みに報いるに怨みをもってすれば、ついに怨みのやむことはない。怨みを捨ててこそ怨みはやむのである。(同、5)
- ⑤ すべてのサンカーラ(存在として形成されているもの、存在の形成力)は、無常である。だからこそ、心を集中して努力せよ。(『マハーニッバーナ経』6:7)
- ⑥ 君たちは、空模様を見分けることは知っているのに、時のしるしは見るができないのか(『マタイによる福音書』16:3)